

# 幼兒の爲の唱歌を作りて

葛原しげる

この頃でも、まだ、童謡といひながら、児童に

は分らない歌が時々發表されてゐると同じく、昔

も、かなり、六かしい児童唱歌がありました。あの

「門松立て——」といふことは、よく分つても

「年のはじめのためしとて」の句の六かしさや、

「をはりなき世のめでたさ」の六かしさが、遂に

「尾張名古屋——」とか、「門松引つ繰り返して大

騒動」とさへ歌はれる様になつて、意外の方面か

ら、児童を笑はします。しかし、此んな替歌

が出来なくて、原作のまゝでは何故、児童を悦ば

さないのでせう。

さういへば、五大節の歌の六かしさ、

「今日の佳き日は——」

と歌はせられて、「佳き日」即ち「めでたき日」と

聞き分けのつくのは大人です、児童は「よき日」

ときけば、「善き日」と思ふ他はないのです。また

「雲にそびゆる——

高峯あろしに草も木も

なびきふしけん——

と歌ひながら、その意味の、特に隠れたるその  
眞意の分る児童が、小學校にさへ多いとは思はれ

ませぬ。かくて、此の五大節の歌を、幼兒向に作  
る事にしましたのが、大正四年頃の事でした。

一月一日（小松耕輔氏作曲）

一、けふは今年の一一番はじめ

一月一日 うれしいな

けふから 私のお年が一つ

大きくなつて うれしいな

今日から おとなになりませう

二、けふは 今年の一一番はじめ

一月一日 をかしいな

けふから 誰でも も年が一つ

大きくなつて をかしいな

皆が 大人になりました。

（大正幼年唱歌第四集）

時には、空間スペースと違つた、目に見え、手が觸る事の出来る境界が無いのに、只一夜のこと——それこそ、一瞬のことだ、昨日となり、明日となる事

のを、かしさ、そして、年が一つ大きくなる事の、うれしさ、いはゞ、その不思議を歌はうとしたのです。自分の年が一つ殖える様に、誰でも、今日から年が一つづく殖えるといふ事實の不思議を狙つたのです。

ところが、第一節の末行の

今日から おとなになりませう

の「おとな」は「おとな」の意味でしたが、多くの児童は、さうでなく「大人」と思ふといふので、はやく、大人になりました。

と直しました、即ち曲も「ラララソ」は「大人に」です、「おとな」には「ミミソソ」かと思へます。

それにしても一月一日、即ち新年といふものは、かうした嬉しさ、をかしさの他に、人間としてはまづ「おめでたう」といふべきであつたかと、今考へて見てゐます。その後、正月の歌は四五篇作りまして、中には、琴の曲についてゐるものもあり

ます。どうしても、「あめでたう」の氣分を出して  
あがなくては、本當の正月の歌にはならない様です。  
その點から此の舊作は駄作であつたと、恥入  
つてをります。

何うしても祝ひ　いたしませうか  
皆で　大きなお聲をそろへ  
萬歳となへて　お祝ひしませう  
天皇陛下萬々歳

今日のめでたい天長節に  
皆で　しつかり　約束しませう

今に　大きな大人になつて

忠義をつくす約束しませう

天皇陛下萬々歳

(大正幼年唱歌第三集)

天長節奉祝の歌も、今日の日出度い日は、天子  
様のお生れになつた日でありますなど、説明はし  
ないで、單刀直入的に、歌つてしまひました。それ  
は、此の歌を歌ふ時、幼稚園でも、きつと、園長  
先生などのお話がある筈ですから——そして、そ  
のお話は、きつと、天長節の由來にきまつてゐま  
すから、それで聞いた事を、再び歌で歌ふ反覆は  
無用とも考へましたために、説明的には歌ひませ  
んでした。

天長節（小松耕輔氏作曲）

今日は　めでたい天長節よ

しかし、此の内容は、何も、天長節に限つたこ  
とではありません、もつと、何か、ピリリとした  
事が天長節として謂へさうなものだと、しきりに  
考へたのですが、何うも、幼児向には、他に妙  
案も無くて、此のまゝにしてをります。

序ですから、「紀元節」の歌についても書き、下  
さい。幼児の爲ですから、全く説明も具體的に、  
單純に、

紀元節（小松耕輔氏作曲）

昔 神武天皇が  
惡ものどもを平らげて  
始めて 天子の御位に  
おつきなされためでたい日  
その日は 二月の十一日よ  
祝へや 祝へ 紀元節

そして、三曲とも小松氏の曲ですが、『大正幼年  
としました。所謂「味もうるほひもない」ので  
すが、雅語の難解よりは、せめて、歴史的事實を  
覚えさせておかうといふのでした。しかし、まことに、工夫の足らない事でした。

昨年來、全國の重な幼稚園へ願つて、  
唱歌』は、『大正少年唱歌』と共に、歌詞は全部私  
ですが、曲は、梁田氏と小松氏の分擔になつてゐ  
ますため、三大節の歌の中、一曲ぐらゐは、と、  
梁田氏へ求めましたけれど、少くとも、宮内省に  
關する無い曲は、自分よりは、現に宮内省の官吏

「缺乏を感じてをられる唱歌」

はありませんかとも尋ねしましたところ、多く  
の御返事の中に、「三大節の歌」が擧げられてを  
りました。私共としては、以上、三つとも發表し  
てはおいたのですが、これでは如何にも、満足で  
ないのをせう。昨年でしたか、全國の保育者大會  
で、文部省へか、三大節でしたか、明治節を加へ  
て、四大節でしたかの歌の幼稚園向のものの新作  
提供を求められたとかきこまましたが、何うなりま  
すか。幾つもは不要ですから、私共は、手を出さ  
ないでくる次第です。

でもある小松氏こそ、とて、極めて謹嚴そのものであつた梁田氏の氣象は、今でも、少しも變りませんので、一面、感激を強うしてゐる所です。とかく、「藝術」の美名にかられ、「藝術」の光にかられて放奔でありますぎたり、偏派でありますぎたり、また時に、デカダンにさへ陥る傾も無いではない斯界に於て、氏の謙讓と操守とは、實に力強いものがあるではありませんか。

## ○

イキサツを歌つたのが、大正四年で大正幼年唱歌第四集に梁田氏曲で發表しましたが、大正十三年の改版には、非常に苦心して、ほんの少しだけ改作しました。別記の上段が原作で、下段が改作です。第一節と第二節との位置を替へた譯は書けば長くなりますが、替へた方が、如何にも双六らしいからでした。そして、

同じ所に出會つたり

を、

同じ所<sup>で</sup>出會つたり

ともしてみましたが、もつと、慾ばつて、  
一緒になつたり 分れたり

と二つの事柄を、謂ひました。また  
を、

コロリと振つて、

今も昔もかはらず、「双六」の遊びは、幼兒も大人を仲間にして、大人の欠伸は誇はないですむ興味あるものらしいです。尤も、本當の双六ではありますまですが、兒童雑誌の正月附録で、十年ではない二十年三十年一日の如く、人氣があつて、實用向なものは、双六であります。その双六の神祕は皮肉は、哲學は、ユーモアは、大人小人の咲笑を伴つて、如何にも愉快です。かくて、それらの

としたのも、小さい事ですが、

コロリと振つたら

一、雙六遊びは をかしいな

どんくーとんで、もう直きに  
上ると思つて喜んで  
コロリと振つて、振り出しへ  
又も戻つて振り直し  
雙六遊びは をかしいな

一、雙六遊びは面白い

かはりばんこに振りながら  
一緒になつたり、分れたり  
前になつたり、後れたり  
後から行つても先上り  
雙六遊びは面白い

二、雙六遊びは 面白い

かはりばんこに振りながら  
同じ所に出會つたり  
前になつたり後れたり  
後から行つても先上り  
雙六遊びは 面白い

二、雙六遊びは、をかしいな

どんくーとんで、もう直きに  
上ると思つて、喜んで  
コロリと振つたら、振出しへ  
又も戻つて、振り直し  
雙六遊びは、をかしいな

どんくーとんで、

もう直きに上ると思つて

喜んで、

コロリと振つて

振り出しへ又も戻つて

とつとくと、如何にも押韻の興味に毒せられる様  
で、齒も浮きさうになりましたので、途中で一個  
所、「て」でなく「たら」と、多少の意味も變へ、

韻は、すつかり變へたのでした。かういふ小さい

教授は、

點の、それこそ、苦心は、たしかに、苦心でせうが、しかし、かう變へて、少しでも善く改つた後の嬉しさは、全く、所謂鬼の首をとつたとでもいふのでせう。さつきの苦心など、雲と消え去つて、嬉しいばかりです。何の苦も殘らないから又次の苦心が、苦でなく迎へらるゝのだと思はれます。

○  
幼兒の唱歌は、時に、曲によりてのみ支配される事もあるから、歌詞より早く、まづ曲を作つて、それに後から歌詞をつけて見たら何うか。

曲と歌詞との結合の美妙さは、表と裏か、車の兩輪か、五と五と加へて十になるのか、ともかく實に、美妙な關係でありますのに、大正三年初夏の頃、初めて、大正幼年唱歌とも何とも名もつかないで、幼兒唱歌の創作にとりかゝりましたして十數曲を得ましたので、私共作者三名が、出かけまして、安井哲子先生が、主事でをられた頃のち茶の水の幼稚園で實演して批評を乞ひました時、倉橋

と謂はれましたのに、強いヒントを與へられまして、まづ、出來たのが、「ピアノ」であり「汽車」であり、そして、雪でした。小松氏の曲ですが、非常に、高低のアクセントの明確な曲でした。それに、アクセントを合せて、「雪の降る」歌を作つて、歌詞をあてはめようといふのです。六かしい事です。雪の「ゆき」は、「ゆ」よりは「き」が高いのです。「降る」の「ふる」は、「振る」の「ふる」ではないのです。「ふ」より「る」が、しつかり低いのです。それを、曲について、確に當てはめるのですから、困ります。しかし、「ピアノ」の英語本來のアクセントを守つて、アを高くつけえた悦

びに、緊張をつけて、

きれいな雪 どん／＼降れ

降る 降る 降る どん／＼降る

野山に降る 庭にも降る

真白い雪 休まず降る

きれいな雪 どん／＼降る

とつけました。只一つ、「庭」の「に」が上りすぎ

るのでしたが、「野山」の次の「には」ですから、  
よく「には」のアクセントが誤つて「に」にあつ  
ても、他に「には」とふ物はないから心配なしと  
きめて、さて、第二節としては、何を歌はうかと  
困つた末には、少し、づるいのですが、

一、とべ／＼ とんび、空高く  
なげ／＼ とんび、青空に  
ビンヨロ／＼  
樂しげに 輪をかけて

降れ 降れ 降れ どん／＼降れ  
野山に降れ 庭にも降れ  
真白い雪 休まず降れ

としました。これなら、アクセントは、第一節と  
全然、同じですから。  
此の形式上の整一是、のち、大正七年になつて  
作りました「とんび」にも試みました。

とんび（梁田貞氏作曲）

## ビンヨロー／＼

樂しげに 輪をかいて

(大正少年唱歌第一集)

まひます。

さて、前の「雪」ですが、第一節では、どん／＼降るのを見て、第二節で、もつと／＼降れと勇み立つ子供心を歌つた積でしたが、教へて見ると、それよりも、まづ、降れ／＼と祈つて、そして、降り出したから、「降る／＼／＼」といふのが正しいといふ事になりました、大正十三年には、順序を替へたのでした。

○

幼児の歌に、力強い生命を與へるものは、擬聲であり、擬態であります。それは、大人の世界でも、表現上重い役目を果すのですが、幼児の表現から、それを無くしたら、幼児の理解は、不徹底不十分を通り越して、ぎこちないものになつてしまふのです。

次第に進みますと、幼児は、旋律の音楽を初めます。五六歳の子供が、自分で作った歌を自分で節をつけて歌ひますが、これがまた、如何にも自然で、大人の頭で子供らしく作ったものは、どうかすると、歌詞も曲も不自然なものになり易いのです。例へば、嘗つてか

ところで、拙作の「ストーブ」の中の「トロ／＼」を、幼児が、「ボウ／＼」としたかつたといふ記録があります。それは、大正十二年六月發行の、黒崎艶子氏著『幼児の想像生活と其教育』の二四六頁にあつたのですが、

……未開人は、喜ばしき時に太鼓を叩きますが、同時に、必ず踊るのであります。幼児に於ても亦、律動<sup>リズム</sup>から成る音を口にしながら、手足をこれに合せて動かし、ごく簡単な踊をするのは、私共のよく見受けゐるところです。

ういふ事がありました。ある寒い日に「スト

と、

「ブ」といふ歌をうたつてゐました時、その歌詞は

廊下は寒い風が吹く

お庭は 雪が降つてます

それに お部屋は暖かい

どうして こんなに暖かい

それは お部屋のストーブが

とろ／＼ もえてゐますから

といふのでした。子供は、それを聽いてゐましたが、その中の一人が、「つか／＼とストーブのところへ見に行きました。そして「先生とろ／＼よりも、ぼう／＼燃えてゐるつて歌ひませう」と申しました。

と讀んで、私は、幼稚園のストーブは、何うしても、トロ／＼であると信じて、發行所氣付として著者へ手紙を出しましたところ、仙臺の大學生研究中の著者から返事が参りましたものを、今、その著書にはさんでおいたので、取り出して見ます

(前略)あのストーブは石炭に候。その時は恰

度石炭の火が盛に焰をあげて燃え居りしため

に、幼兒はかく申したるにて、歌詞そのもの

としては、トロ／＼といふ方が、やわらかさ

感じを與へると思はれ候。あの時のストーブ

は普通學校等にて用ふるものにて(以下略)

とあります。私は、何といつて手紙を呈したか覺

えておりませんが、兎も角、幼稚園のストーブは

傍に寄れない程熱くしたり、急に冷めさせない様

に、トロ／＼と、少しづゝ燃して、室の溫度を不

變のものにしてあきたいと、今でも思つて、トロ／＼を、ボウ／＼に替へようとはしません。事實

此の著者の御手紙にもあるとほり、石炭の火だつ

たら、殊に、盛んに焰をあげて燃えてゐる時であつたら、「ボウ／＼」でせうけれども……。

それ位、幼兒は敏感であることと思ふ時、一語も一音も、忽に出ない事を痛感しないではをられません。

(昭和六、五、三一)